
The possible world

田無 兼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The possible world

【Nコード】

N9151Z

【作者名】

田無 兼

【あらすじ】

近未来、とある理由によりVR技術の発展した世界。

人は自らの技能すら売り物とし、世界中で日夜売買が行われていた。そこに現れた最新のVRMMOゲーム、「The possible world」

脳内インストール型スキル制を売りとしたこのゲームはまたたく間に世界中で大人気を博していた。

それから2年後、一人の大学生が新たにゲームの世界に入る時物語は始まる。

これは、近未来のネットゲを遊ぶ人々を描いた日常形小説である。

0 話

近未来

認知心理学、人間工学等の様々な分野からのアプローチにより、VR 技術を用いた技能学習方法が実用化された世界。

仮想空間であるVR世界に於いて技能学習を行うと、高効率でその技能を習得出来る。

このような内容の論文が発表されると、世界は一斉にVR技術に目を向け始めた。

そして、様々な問題がありつつも人類はその課題をクリアし、仮想現実による技能学習が一般化され始めた頃、更に新たな論文が発表された。

技能データの脳内インストールによる技能学習法、という論文である。

VR技術が発展していく中で、人は脳のメカニズムを次々と解析していった。

この論文は人の技能学習法の到達地点、技能を直接脳内にインストールし技能を学習させる方法について論じていた。

人々は色めき立った。

自分たちはやりたい事があればその方法を即座に手に入れ、することが出来るのだ、と。

しかし、これには1つの問題があった。

肝心の技能データの取得方法である。

技能データを得る方法は1つだけ。

人間の脳からその技能データを抽出するというものであった。

これの何が問題なのか？

脳内からデータを抽出する際に危険が伴うのだろうか？

そうではない、問題はデータを抽出すると抽出された者からその技能が喪失されてしまうこと。

そして、その抽出されたデータがコピーするたびに劣化していく事である。

だが、それでも好きな技術を極めて容易に習得する事を可能とするこの方法は世界で即座に研究され始めた。

数年後、この技術は確立され世界に広まった。

そして、技能データの市場化が始まったのである。

人々は金で技能を買い、また技能を売って金に換え始めた。

しかし、技能データには限りがあり、データには莫大な値段がついた。

そこで、世界の目は仮想現実での技能学習に向かった。

仮想現実には様々な技能の習得場を用意し、技能を習得し売買を行う。新しいビジネスの形がそこにあった。

そしてその形は次々に広まっていき、それは当然娯楽にも向かった。

VRMMO。

VR技術が発展し確立されたゲーム体系。

そこに登場した最新にして最高の人気を誇るゲーム。

その名はThe possible world。

脳内インストール型スキル制を導入したVRMMO。

これは、そんな近未来における少し変わったネットゲを遊ぶ人々の物語である。

1話

「暇だ」

目を覚まし、30分程ぼつとしたあとそうつぶやいた。

更に5分程そのまま動かずにいると腹の虫がなった。

その音を聞いたとたんに腹が減った気がしてくる俺の頭は、かなり都合良くできているようだ。

身を起こし、ベッドの足側に配置された冷蔵庫のドアを開け中身を見ると調味料ぐらいしかない。

「そうか…昨日の夜にやけ食いして全部喰っちゃまったんだっただな」

昨日はバイト先に顔を出して辞めると言ってきたのだった。

長く勤めていただけに辞めるのには抵抗があったのだけど、さすがにあんなへマをしてしまうとバイト先には居られない。

「結構給料良かったんだけどなあ」

愚痴りながら部屋備え付けのキッチンまで歩き、炊飯器の中身を確認するとまだ白飯が残っていた。

「よし！」

少しテンションが上がり、冷蔵庫からバターを取り出しスプーンですくいフライパンに乗せ、火をかける。

バターをフライパンいっぱい溶かしながら広げ、ご飯を投入。

ご飯の上に塩こしょうをふりかけ、しばらく炒めた後に醤油を入れ

る。最後にもう一度炒めると特製醤油バターライスの完成だ。

「男が作る適当料理だよな」

苦笑いしながらも香ばしい匂いに食欲がそそり、いそいそと皿に盛りつけテーブルへと持っていく。

「いただきます」

両手を合わせつぶやくと、早速右手にスプーンを持ち食べ始める。食べながら、左手を軽く振ると左手首のDデバイスが光り、左手の先に長方形の立体スクリーンが現れる。そこに左手の人差し指を這わせ、画面をスクロールさせニュースのアプリを開く。

「今日も特に気になるニュースは無い、か」

その後はネットブラウザを開き、いつも見ているサイトを巡回していく。

「しかし…便利なものだよな」

食事を終え、音楽アプリを起動させながら本格的にネットサーフィンを始めた時、ふと思いつ。

今の世の中はDデバイスがあればたいいの事ができてしまう。勿論料理などは無理だが、かつては別々だったというPC、携帯電話、ゲーム機等電子機器の類が全てが集約されているのだ。

といっても俺自身はそれらが別々だった時代をあまり覚えていないのだが。

画面から目を離し、自らの手首にある物を見る。

Dデバイス 正式名称は違はずだが、世間的にはそう呼ばれている機械だ。

電子機器の類のほぼ全てが集約され、更にはVRダイブを行うためになくてはならない物。

VR技術が発展し、各種VR製品を使用するためには必要不可欠であり、全世界でほぼ全ての個人が所持しているといわれているが「実際どんなもんだか。この時代にだって電気を使わない生活してる人も居るって聞くしな」

まあしかし、少なくともこの日本では全国民が所有していると言っても嘘にはならない。

なにせ、今やこれで口座の確認や買い物支払いなどを行えるし、個人判別も行えるので最高峰の身分証明にもなる。免許等もデータで呼び出せるので免許不携帯になる心配も無しと素晴らしい物だ。常に身につける事が習慣化しているため盗まれる事もないし、DNAによる識別があるので他人の物を使う事もできない。最早良いところしかないように思えるが、面倒くさい事もある。

Dデバイスが頭部、両の手首、腰、両の足首の全てにつけなければいけない物だからだ。

「けどまあ、仕方ないよなあ」

これも全てはVRダイブを行う際に身体データを取得するために必要なのだという。

そう言う事もあり、Dデバイスは今では世界中で生産されている。企業により色々の違いがあり、Dデバイスの選び方でセンスを問われる事もある。

俺の場合は実用性を取り、日本製の通信速度とデータ容量に特化したモデルを選んでいる。デザインは黒字にメタリックブルーの線

が入った物だ。ちなみに一月のデータ通信料金は5000円である。

「あ…そうか、こいつの金も考えないと駄目だな」

本体はともかく月々の通信料金、そしてこの部屋の家賃に生活費。今までは全て自分で払ってきた。

その為に結構な時間をバイトに費やし、貯蓄も殖やしてきたのだが…そのバイトは昨日辞めてしまったのだ。

「貯金は…50万か」

銀行口座をチェックし、考え込む。

これだけあれば2ヶ月は大丈夫なはずだ。となれば、その間に新しいバイトを見つけなければいい。幸い今は夏休みが始まったばかりであり、時間はいくらでもある。

「しかし、それで良いのか？」

大学に入って2年目の夏。1年目はバイト三昧だった。来年からは色々と忙しくなるだろう。何かやるとしたら今しかないんじゃないか？

「ふん、ばかばかしい」

一瞬頭に浮かんだものを気の迷いと一蹴する。

今の時代、技能インストール学習法が広まったこの時代ではとにかく金を貯めるべきなのだ。金さえあれば何だってできるようになるこの時代では。

しかし、しばらくバイトをする気になれないのも確かではあった。失敗という物は思う以上に身に伝わる。

気晴らしにネットサーフィンを続けていると、興味を引かれる広告を見つけた。

「目指せ一攫千金、開拓者求む…何だこれ？」

随分と大々的な広告だった。

美男美女が左右に立ち、船に向かって手を向けている絵に大きな文字で誘い文句と共に書いてあるものがあつた。

「The possible world…そうか、こいつが噂のネットゲか！」

『The possible world』

VRMMOといわれるゲームの1つだ。

VRMMOというのは、VR技術の発展により可能となったVR製品の1つで、まあ簡単に言えば仮想現実で行われるネットゲである。

確かThe possible worldは2年前から始まつ

たはずだが、俺はあいにく受験とバイトで縁がなかった。

ただ、今あるネットゲの中で1番人気があるという事だけは聞いていた。ネットゲに触れない俺がその噂を目にする程なのだから、よほど人気なのだろう。

「なににに、2年連続ユーザー満足度全世界1位、総プレイヤー人口全世界1位、他色々あるな…ん？」

ざっと説明を流し見していると、見慣れない単語が飛び込んできた。

「全世界初、脳内インストール型スキル制を採用。身につけたスキルを売って君も一攫千金を目指せ、か」

脳内インストー型スキル制とは初めて聞く単語だ。だが何となく分かる。これはきつと現実と同じなのだ。

身につけた技能を売り買いする。今の世の中ではそれが可能だ。理屈は知らない。大事なそれはそれが可能という現実だ。

医者になる方法は最早医学部に入るだけではなくなった。

医者としての技能データを買い、脳内にインストールすることで、人は試験のみで医者になる事が可能になったのだ。

だが、技能データは有限だ。それゆえ市場では秒単位で値が変わる。

需要と供給を見極めれば、自らの持つ技能を売りさばく事で億万長者になることも夢ではない。

つまりはこのネットゲもそうなのだ。ゲーム内で技能を磨き、それを売る事ができる。

そして上手く売りさばけば

「一攫千金ってわけだ」

ゲームの舞台はファンタジー世界での未開大陸。プレイヤーの目的はその開拓。

ゲームシステムの詳しい内容はゲーム開始時にインストールしてくれる、と。

悪くない。気晴らしになり、更に上手くいけば儲ける事もできるときたもんだ。

何故かは分からないが、かなり乗り気になってきていた。

気が変わらないうちにユーザー登録だけでもしておくでしょう。まずは名前だな。

飛渡
翔一
つと。

2話

「これで終わりかな」

登録完了のメールが届き、一息をつく。

登録が随分細かったため、少し疲れが出た。

「まあ仕方ない事もな」

なにせこのゲームはゲーム内で技能 ゲーム内ではスキルと呼ぶらしいが をやりとりするのだ、嚴重にしすぎて悪い事はないのだろう。

とは言っても、技能の抽出やインストールをするためには必ずDデバイスを紹介事になるし、そこら辺は他人の好きにできないようにDデバイスにセイフティがあるはずなので問題は無いはずだが。

「実際、今までそう言う事故は起こってないようだしな」

技能抽出は本人の意志でしか行えない。Dデバイスに個人認証機能が入っているのもこのためといえるだろう。

もし、他人の手で技能抽出が行えてしまうと危険だからだ。

何故危険なのか。それは抽出した技能は、抽出された人の脳内から消滅するからだ。

仮に「呼吸の仕方」という技能を抽出した場合、抽出された人は即座に「呼吸の仕方」を忘れてしまう。これはどうする事もできない。

だからこそ、技能抽出は本人の意志でのみ行われるし、抽出されたデータとなった技能はあまり多くない。

抽出されたデータの中でも優秀な質を持ったデータは更に少ない。それゆえに、技能データの売買で一攫千金が狙えるのだが。

「まあ子供に買い与えるデータならたいしたことないんだろうけど……」

少し嫌な事を思い出した。

頭を軽く振り、頭に浮かんだ記憶を消す。

「とりあえず、天下のWCDが運営してるんだ。おまけに月額1万、やばい事にはならないだろう」

WCD、俺も詳しくないが多国籍企業でVR技術系の企業の中ではトップクラスの大企業だ。確か社訓が「私達はできる！」とかでとにかく何でもやる企業だったはずだ。

「どうせやる事もないんだ、さっそくやってみるとするかな」

ベッドに横になり、さつきDデバイスにダウンロードしたThe possible worldを起動する。

<このゲームはVR製品です。使用するためにはVR空間に行く必要があります。>

<VRダイブしますか？>

<Yes/No>

Yesをタップすると目を閉じる。

すぐに独特の音が聞こえてくる。風鈴のような音だ。それが一定の間隔で聞こえてくる。

これは俺のDデバイスがVRダイブを行う時に鳴る音だ。結構気

に入っている。

そして、段々意識がなくなっていく。風鈴の音が遠ざかっていく。

ふと気づくと、俺はどこかの部屋にいた。

3畳程の広さの部屋で椅子に腰掛けている。

「ここは？」

VR世界に行くのは初めてではない。今の世の中、むしろ行った事の無い人の方が少ないだろう。

VR世界といっても現実と殆ど変わりはない。Dデバイスによる
個体認証で身体情報も現実とほぼ変わりがない。違うのはせいぜい
身体ダメージを受けても死なないといったぐらいか。

実際に臓器等があるわけではないので死ぬ事はない。だが痛みは
感じる。それが何故かと言えば。

「確か、リアリティを保つ必要があるからだったか？」

元々VR技術が発達したのはVR世界で人の技能を上達させるた
めだとか学校の授業で習った気がする。

その為には限りなく現実と近い状態にする必要があるとか。

「まあショック死はしない程度にリミッターがかかっているから大丈
夫なんだよな」

良いながら席を立ってみる。視線の高さはいつもと同じ170セ
ンチちょい上。

問題なく身長は同じのようだ。左の壁に掛かっている鏡を見れば、
何処にでも居るような顔立ちの男の姿がある。年齢に比べて老けて
ると言われる顔、俺の顔だ。

「そろそろよろしいでしょうか？」
「!?!」

あわてて辺りを見渡すと、正面に女性が立っていた。

美人と呼んで良いだろう。顔立ちはアジア系の中でも日本人に近く、髪と目は黒いが肌は日本人にしてはかなり白い。目はくりっとして大きく、髪は肩までのショートボブ。身長は俺の肩ぐらい。服装は、何とかまさしくファンタジーだ。

全身を金属でできた鎧で着飾っており、腰からは純白の鞆に包まれた剣を下げている。

鎧でよく分らないが、腰つきが色っぽい割に胸はあまり大きくないようだ。

「あの、大丈夫でしょうか？」

「あ、はい、大丈夫です！」

思わず呆然としてしまった。

いきなり美人に声をかけられれば誰だってそうなる…はずだ。

「すみません、いきなりだったからビックリしてしまって…えっと、あなたは？」

「はい、私はTPW、The possible worldの日本地区担当GMの一人、山桜と申します」

彼女はにっこりと笑って告げた。

しかし…GMだって？

「えっと、GMってことは運営の人って事で良いんですよね？なんでそんな人がわざわざ？」

「それはですね、あなたがここに来てからずっと独り言ばかりでキャラクターを始めないからです」

頬を若干ふくらませ、いかにも怒ってますという風にこちらを見る彼女。

それにしてもキャラクター、確かにゲームを始める以上キャラクターは必須だと思うが、始めないとはどういう事か。

「始めないと言われても、やり方が分からないんですが」

無然としながら言うと、彼女は信じられない物を見るようにこちらを見て。

「あの、規約とかはちゃんと読んでますよね？」

「勿論、大事な部分はちゃんと読んでます」

「ではホームページでキャラクターの仕方などは読みましたか？」

「…いや、それは読んでませんが、しかしですね。こう言うのは普通説明がある物では？」

彼女はため息をつき、こちらの手首を指さした。

「ほら、手首のDデバイスが反応していますよね？それを起動してキャラクターを始めます」

あわてて左手首のDデバイスを見ると確かに光が点っている。

普通反応がある時は振動もするはずなのだが、気付かなかったよ
うだ。

「どんだけうつかりさんなんですか、それにキャラクターの仕方ぐ
らいは読んでくるものですよ？」

「お手数おかけしてすいません…」

手首を振り、Dデバイスを起動させると画面が現れ、その中に俺の全身像が映っていた。

<これからキャラメイクを始めます>

<まず種族を決めて下さい>

「種族？」

「…まさか、そこから分からないんですか？」

軽く首をかしげると、山桜さんがおそるおそる声をかけてきた。

「はい、どうもそうみたいで…」

「そうみたいって…はあ、分かりました。軽く説明させて貰います」

彼女は軽く首を振ると、右手を大きく振った。

彼女のうっすらとピンク色をしたDデバイスが起動し、大きな立体スクリーンが現れる。それを彼女は指で操作し、しばらくして画面をこちらと共有設定にして見せてくれる。

そこには5つの人らしき姿が映っていた。普通の人、何か頭に耳が生えててしっぽもついてる人、耳が長い人、えらくでかい人、えらくちつこい人の5人だ。

「TPWの世界にはかなりの数の種族が存在します。しかしプレイヤーが使用出来る種族は人間、獣人、妖精人、巨人、小人の5種類。更に巨人と小人には身長制限が存在します」

「身長制限ですか？」

「はい、VR世界では当たり前前なのですが、プレイヤーとキャラクターの身体能力は同じになります。これは現実と仮想現実で違和感

の無くすためですね。その為、巨人種族は身長250cm以上、小人種族は身長145cm以下と定められています」

「それはまた…随分と厳しい制限ですね。特に小人なんか、昨日145cmでも今日は146cmに成長してた、なんてこともあり得るんじゃないですか？」

「はい、その場合はゲームをする事はできません。その為小人種族になられる方は非常にまれです」

なるほど、5種類とは多いと思ったが、自動的に2つは消えた。残り3つなわけだが。

「えっと、人間はともかく獣人と妖精人について教えて欲しいんですが」

「獣人は見ての通り、動物の特徴が付与される種族です。何の動物になるかはランダムですね。妖精人は耳が長く、線が細くなります。」

「はあ、見た目の違いは分かりましたが、身体能力としての違いはどんな物なんでしょう？」

「ありませんよ」

あっけらかんと言う彼女に視線を合わし。

「無いんですか？」

「無いですね」

「じゃあ何のために仕様種族が用意されてるんですか!？」

意味が分からない。能力に差違がないなら種族を選ぶ必要なんて無いじゃないか。

「んー、そうですね。一番の理由はやはり選べる種族が1つじゃつ

まらないでしょう?」

「そりやまあそうですね…選んでも違いがないんじゃない?」

「まあまあ、そうあわてないで下さい。ちゃんと種族間に違いはありますから」

あるのかよ!

思わず頭の中で突っ込んでしまった。

しかし、身体能力に違いがないなら一体何に違いができるっていうんだ?

いいですか?と彼女は人差し指を立ててノリノリに解説してくる。

「そもそも種族間に差がないのはこのゲームの肝である脳内インストール型スキル制を生かすためではあるんですが、それを説明すると長くなるので止めます。とりあえず覚えておいて欲しいのは1つ。種族によって装備出来る物とできない物がある、という事です」

「装備:ですか」

「そうですね!このゲームでは装備はとても重要なファクターを持っていると言って過言ではありません。ですので、種族を選びはそこ重要なんですよ?」

ふむ、確かにそうなると種族選びはかなり大事だな。

「じゃあ種族によってどういう物が装備出来たりできなかつたりするんです?」

「そうですね、獣人なら金属製の防具などは装備出来ませんし、妖精人は更に革製も駄目ですね。妖精人はおまけに近接系の武器にも装備の制限があります」

「制限はつかじやないですか」

「いやいや、その代わりに妖精人は魔法系の装備に制限がありませんからね。魔法使いになるなら妖精人はかなりオススメですよ!」

「魔法使い…ですか？」

きよとんとして山桜を見つめると、彼女の方もこちらを見つめてきて。

「ええ、魔法使いですが…どうかしましたか？」

「いや、魔法使いなんてなれるものなのかと思ひまして」

VR世界は技能学習のために発展した。それゆえにVR世界では現実でできない事はできない。これがVR世界の常識である。

実際、魔法を使えとか言われても全く想像出来ない。

「ああ、そうですね…厳密には魔法使いとちよつと違うわけですが」といふと？」

「さつきも言ったように、VR世界であってもプレイヤーとキャラクターの身体能力に差はありません。だから、物語にあるようなMPなんてものもあるわけがないんです。そのため、この世界は魔法が使える装備という物があります」

「魔法が使える装備？」

ちよつと分かりにくいですね、と彼女は笑いながら説明を続ける。

「現実世界の銃みたいな物ですよ。例えば炎の杖というアイテムが合ったとします、その杖特有の発動動作を行えば炎を敵に向かって放つ事ができるというわけです」

「ああ、なるほど、確かに純粋な魔法使いでは無いですね」

「はい、この様にTPWではアイテムに様々な能力が付与されます。それを使う事で現実には不可能な事も可能となるんです！」「だから可能の世界、なのか…分かりました」

色々と納得がいった。

しかしそうなるとますます種族選びが重要になってきたな。顎に手を当て、どれにするか悩む。しかしこれといったものがない。逆に言えばどれも面白そうな気はするしな。

「特にこれがやりたい、といったものがなければ人間を選ぶのが良いと思いますよ」

迷っている俺を見かねてか、彼女が声をかけてきた。

「それは何故でしょう？」

「人間種族は他の種族に比べて装備の制限が圧倒的に少ないんです。だから人間種族なら色々な事をとりあえず試せると思いますよ」

「はあ…しかしそれじゃみんな人間種族を選ぶんじゃないですか？」

いくら見た目がいつもと変わらずつまらないといっても、人間だけそんなに優遇されていれば皆人間を選ぶだろう。

そんなこちらの思いを知ってか、それはですね、と山桜が説明を始める。

「人間は確かに装備制限が少ないんですが、逆に専用装備も圧倒的に少ないんです」

「専用装備？」

また新しい単語が出てきたぞ。

「専用装備というのは、そのまま種族専用の装備の事です。人間専用とか獣人専用とかですよ」

「そんな物まであるんですか」

「まあ、まだゲーム内でも数えるくらいしか見つからない物で

すが、比率から言って人間種族専用の装備が少ない事は確かですね」
なるほど、人間は確かに汎用性はあるかもしれないが、最終的に
上に向かうなら違う種族の方が良いのだろう。

さて、今まで出た情報を踏まえて俺が選ぶ種族は…

「よし！」

そこから更にしばらく考え、結論を出した俺は自らのDデバイス
画面を操作した。

軽い音と共に画面に文字が現れる。

<種族選択>

<人間種族が選択されました>

<次の選択肢へと移行します>

3話

「人間で良かったんですか？」

こちらを見ていた山桜さんが声をかけてくる。

「ええ、そもそもゲームの内容もあまり調べてませんし、それならできる事が多い方が良くと思いますよ」

それに元々長く続けるつもりではないのだ。あくまで夏休み中の暇つぶし。ついでに儲けられたらラッキーといったところだろう。そんな事よりも気になる事がある。

「あの、付き合っていたいてありがたいんですが、良いんですか？」

「ああ、大丈夫ですよ。今丁度昼休みなので」

「その、余計に申し訳ないんですが…」

まさか昼休みだったとは。

時計を見れば確かにそんな時間だ。しかしこれ以上付き合わせるのはさすがに申し訳ない。

「あの、ここから先は一人でやりますので、大丈夫ですよ」

こちらの言葉を聞いた彼女は、少し考えるそぶりをした後こちらにほえんだ。

「折角なのでキャラメイクだけでもおつきあいしますよ。これも御仕事ですから、気にしないで下さい」

美人が笑うと破壊力がでかいが、仕事だからと聞いて少し冷静になれた。

そう、向こうも仕事だ。月額1万円はでかい。どうせなら向こうだって長く続けて貰いたいものだろう。

「ではお言葉に甘えて…次は外見ですか」

< 外見を決定します >

< 髪型を指定して下さい >

Dデバイス画面には、新しい文字と共に無数のサンプル画像が浮かんでいた。

「さっきプレイヤーとキャラクターに身体能力の差はないって言ってましたけど、外見とかは変えても良いんですか？」

「はい、勿論そのままでも大丈夫ですけど、やはり仮想現実ですから、普段とは違う自分になりたい方が多いですね。身長と体重は変えられませんが、髪型や顔、髪や目、肌の色とかも変えられますし、外見だけでもがっしりさせたりとかもできますよ」

なるほど、外見を変えるだけなら自由自在というわけだ。

しかし、そこまで変える事ができるんだな。VR世界では違う自分になる事ができるとは聞いていたが、今までそう言うサービスは受けた事がなかったし。

「あれです、別のサービスで使ってるアバターがあれば、それを使う事もできますよ？」

「残念ながら持ってないんですね。しかしこれ1から考えるのはめんどくさいですよ…」

「一応そういう人のためにサンプルアバターがありますけど」

そういつて彼女が指し示した部分には完成されたキャラクターが何人も並んでいるが。

「どれも俳優みたいな奴ばかりだな…」

一般的に格好いいといわれるような容姿ばかりだ。この中から選ぶのもなんだかためらわれるな。

そこからいくつか適当に作ってみたものの、これというものができない。

山桜さんも側でニコニコと笑ってくれているが、若干呆れ気味のご様子だ。

10回目のキャラをデリートしたところで決心をする。もうめんどくさいしいいや。

画面をスクロールし、変更無しのボタンを押す。

< 外見の変更無しを選択 >

< 最終確認へと移行します >

「良いんですか？もしかして私急かしてしまっただでしょうか？」

驚きながら山椿さんがこちらへ話しかけてくる。

申し訳なさそうな顔を見るとこっちの方が申し訳なくなってしまう。

実際にこっちが面倒くさくなっただけだ。

「いや、そんな事ありませんよ。現実そのままの人って珍しいんじゃないかなと思ってやっただけですから」

そういえば、話をそらすついでに気になってた事でも聞いてみるか。

「あの、このキャラメイクって別に現実世界でもできますよね？何でわざわざこっちでやるんですか？」

現実世界でやっていれば恥を掻く事も、山桜さんに迷惑をかける事も無かつたろうに。

まあこんな美人と話せたのはラッキーだったけど。

ああ、それはですね、と彼女は笑顔になって話し始める。

「もう少ししたら分かりますよ」

曰くありげに微笑んでくる彼女。しかしこの人は笑顔が似合うな…と！？

突如身体が輝きだし、視界が白く染まる。

「何だつてんだ！？」

地味に焦ってしまったが、光は一瞬で収まった。一体何が？

「あちらをどうぞ」

彼女の手が向かう先には、さっき見た鏡が…っておお。

「姿が…変わってる！」

といってもキャラメイクで外見を変えなかったので、殆ど変わりはない。

服が17世紀のヨーロッパみたいな布の服に、革の靴へと変わっていて、ぶつちやけかなり似合っていない。

あとはDデバイスが消えている。いや手首に1つだけになっている。

「なるほど、まあVR世界でVRダイブする事はないし、手首のデバイスだけで十分だよな」

「なんだかあまり驚いてませんね…」

まあ、こんだけ変化がなければ驚きはしない。

しかし、彼女がさっき言っていた事が分かった。

「つまり、これが最終確認で、実際に外見を変えていやだったらやり直せる、と」

「ええ、試着ならぬ試アバターってやつですね！」

上手い事言ったといわんばかりに自慢げな顔を見せてくる。

…何を言えばいいか分からない。

彼女もそれに気付いたのか、一度咳払いをするとこちらを見る。

「それで、どうですか？今ならまだ変更可能ですよ」

もう一度、鏡で自分の姿を見る。

やはり服が壊滅的に似合っていない気がするが…

「あの、ゲーム内には和服とかあるんですか？」

「え？どうですかね…あるんじゃないでしょうか。無くても誰かが作ってそうですし」

作るってのがどういふ事は分からないが、おそらくゲーム内で

自由に服が作れるのかもしれない。

まあ似合って無い気がするといっても飽くまで気がするだけ…大丈夫だろう、きっと。

心を決めてデバイス画面を操作する。

<最終確認>

<キャラクター外見はこれでよろしいですか？>

<Yes/No>

Yesを押すと、また画面が切り替わる。

<キャラクター外見の作成を完了しました>

<最後にキャラクター名を入力して下さい>

むむ、名前か…どうするかな。

「ハンドルネームとか持ってないんですか？」

山桜さんが悩み始めたこちらを見て、訪ねてくる。

ハンドルネーム、持ってないな。

うつむ…今までで一番悩んでる気がするぞ？

「思いつかない時は自分の名前をもじってみたらどうですか？」

「名前をもじる…ですか」

「ええ、自分の名前を使うとキャラに愛着が持てますから、かなりオススメですよ！」

そういう物だろうか？むしろ恥ずかしい気もするのだが。

「じゃあ山桜さんも？」

「あ、いや私の場合は合ってるような合っていないような…」

もごもごと口ごもってしまった。どうしたんだろうか？

まあしかし、ここまで付き合って貰った山桜さんのお薦めだ、名前をもじってみるとすると…

うん、これでいくとしよう。

<キャラクター名入力>

<カケル>

我ながら安直だ。翔一の翔をかな読みしてかける。だがまあ、安直ながら良い感じなんじゃないか？

「カケルですか、格好いいお名前ですね」

そういつて微笑まれると、お世辞と分かっているも照れてしまう。照れ隠しに画面を弄り、名前の確認も完了させる。

<これでキャラクター作成は終了です>

<お疲れ様でした>

<続けてゲームの簡単な説明を行います>

<扉を開け部屋から出て、外の者の指示に従って下さい>

これでやっとキャラ作成が終わったわけか…長かったな。

「お疲れ様でした」

山桜さんの方を見やると、彼女が会釈を言った。

「私も昼休みが終わるので、そろそろおいとまさせてもらいます。次の説明はとても大事ですからしっかり聞いて下さいね？」

「あ、その、色々と教えて貰ってありがとうございます！御座いました！」

あわててこちらでも会釈すると、彼女は笑って手を振った。

「それではThe possible worldをお楽しみください。この世界はただのゲームですが、きっとあなたにとって忘れられない世界になる事でしょう。それだけの価値があると自負しますから」

ではまた会いましょう、といって彼女は光に包まれ消えていった。おそらくログアウトしたのだろう。

初っぱなから色々と大変だが、しかしやる気はまったく減っていない。

「それどころか、どんどん溢れてきてる」

ほんの少しとはいえゲームの情報を聞いた。たったそれだけなのにワクワクしてくる。

「こんな気持ち、随分と忘れてたな」

何時以来だろう。きっと中学のあの時以来だ。

山桜さんが最後に言った言葉が頭に響く。

あれは本当だろうか。さすがにただの宣伝だろう。けれども、

「本当であればいい。あれだけ自信満々だったんだ、期待させてもらっせ？」

誰に言つでもなく言葉を口に出し、俺は部屋の扉をゆっくりと開けていった。

4話

扉を抜けた先は廊下のようだった。

左右を見ると、左は行き止まり、右には廊下が続き、扉が等間隔で並んでいる。そして突き当たりには

「階段…か」

どうするべきなのか、と考えていると、階段の方から声が聞こえてきた。

「おい、そこのお前！もうすぐ訓練が始まるぞ。さっさと上がってこい！」

訓練？どういう事だろうか…少し思いにふけり、答えを得る。

これはおそらくだが、もうゲームが始まっているのだろう。

確かゲームは冒険者が大陸に着くところから始まったはずだ。つまり訓練とは大陸に着く前のゲーム説明のことなのだろう。

「さてさて、どんな訓練が待っているのかね」

顔に笑みを浮かべながら、足を声がした方へと進めていく。

階段を上り、目の前にあった少し変わった扉を開ける。

まず目に入ったのは青い色。そして特徴的な匂い。

「海…だって？」

そして気付く。今自分が出てきたところが船の甲板だったという

事に。

「おかしい…揺れなんて感じなかったし、今も感じないぞ？」

「それはだな、揺れると訓練の邪魔だからだ」

振り向くと、先程の声の主がいた。

筋骨隆々とはこういう人の事をいうのだろう。がっしりとした体つきがタンクトップと短パン越しにでもよく分かる。

太い眉と鋭い目は威圧感を感じさせ、俺よりも頭一つ大きい身体も相まって結構怖い。

「良く来たな、新たな冒険者よ。名前はカケルであっているな？」

ニヤリ、としか言い様のない顔つきで笑う男。うん、かなり怖い。

「おい！あっているのか!？」

「は、はい！あってます！」

よしよし、と満足そうな顔つきで頷くと、こっちへ来いと手招きされる。

逆らうのはまずいと本能が感じ、男について行くと、さっきまで気付かなかったが数人の人影があった。

人ではあるが、人間ではなかった。

おそらく獣人だろう人が2人、あとは妖精人が1人に小人が1人。

「って小人？」

そう、小さな身体にとがった耳は、先程山桜さんに見せて貰った小人の姿に似ていた。勿論各部が違うがそれは微々たる差でしかない。

なる人はまれだと聞いていたが、こんなに早く見る事ができるとは。

銀髪の髪をポニーテールでまとめ、凜とした顔立ちと力強い目つきは綺麗な前に格好いいと言いたくなる。最も、身長はかなり小さいわけだが。体つきからは男か女か判別はできない。

「何よ、人の事じろじろ見て。そんなに珍しい？」

どうやらマジマジと見てしまっていたらしい。小人の人からジト目で見られてしまった。

急いで手を振り何でもないとアピール。

しかし、声からすると女性だろうか。ソプラノの良く通る声だ。

いや、もしかしたら声変わりしてない中学生かも。この身長は大体それぐらいの歳だろう。

更に小人が何か言おうとした時、さっきの男が声を発したのでそちらを向く。

助かった。

「さて、今回はお前達5人が同じタイミングでキャラメイクを終えたので、一緒に訓練させて貰う。俺はインストラクターの鬼灯だ、よろしくな」

右手を握り、親指を立ててのサムズアップ。はっきり言って見るのは初めてに近いポーズだ。

他の人達も何も言わずに鬼灯の方を見ているだけだ。気まずい。

うおっほん、と大きく咳払いをし、鬼灯は話し始めた。

「これから、お前達に大陸を開拓する上で必要な事を教えてやる。向こうでのたれ死にしたくなかったらしっかりと聞いておけ。更に今回は少しなら質問にも答えてやれるぞ」

「今回はってどういう事ですか？」

あの外見に全く怯えず小人が質問する。

いやまあ話し方はそんなに怖くなかったけど、あの外見だからなあ……

「いい質問だ。まあ気付いてると思うが、俺はNPCじゃない。所謂GMってやつだな。ふつう訓練はNPCが個々人に行くんだが、たまにGMが行う時があつてな。それが今回つてわけだ。運が良いぞお前達！」

がはは、と豪快に笑う鬼灯。しかしGMだったのか。そりゃそうか、NPCにしては動きが細かいと思つたんだ。…他のゲームのNPCがどんなもんか知らないが。

小人も納得したのか、分かりましたといつて下がった。他の人達もGMが教えてくれると分かつてテンションが上がっているようだ。では始めるぞ、と鬼灯が説明を始める。

「まず分かつてると思うが、お前達冒険者の目的はこの船が向かつている大陸、セントレイル大陸の開拓だ。しかし、あの大陸はまだ未開の土地ばかりであり、開拓された場所も完全に安全とはいえない。野生の獣たちが襲いかかつてくる事もあるし、森はお前達が思っている以上に迷いやすい天然のダンジョンだ。そしてお前達が見た事もないモンスター、亜人もや食人植物など危険が溢れかえっている。だから！ここで最低限、身を守るための方法をお前達に教えておく」

彼はゲームの事とは思えない程真剣に話し始めた。

彼の放つ威圧感と雰囲気、自然と皆話を真面目に聞き始める。なるほど、ゲームの説明をここまで真面目に聞かせられるんだから、

この人はきつと説明がとても上手いに違いない。

俺も他の人達同様、説明に聞き入る事にした。

皆の雰囲気を感じとったか、鬼灯は、いや、鬼灯さんはまたニヤリと笑った。

「まあ、そこまで堅くなるな。しかし、真面目に聞いておけ。そうすればきつとお前達はこの世界を楽しむ事ができる。俺の同僚がよく言っているが、お前達にとって忘れられない世界になるさ、ここはな」

さつき同じ言葉を聞いた気がする。なるほど、山桜さんもGMだし鬼灯さんと同僚なのだろう。

「さて、さつきもいつたがこの世界は危険が山程ある。それに対してお前達は素人だ。中には素人じゃない奴もいるかもしれないが、基本的に素人だろう。そんな素人がこの世界で生きていくにはどうすればいいのだが、一番大事な事はこれだ」

一息ためを作って彼は言う。

「頑張れ」

揺れないはずの船が揺れた気がした。

周りを見ると誰も彼もが呆れたような顔をしている。曰く、何言っただこいつ、と。

その様子を見ても彼は全く動揺せず話を続ける。

「お前ら全員、何言っただこいつとでも言いたげだな。そう思うのはよく分かる。今のは心構えの問題だが…この世界を楽しむ上で一番大事なことだ。覚えとけよ」

頑張れ、か。

そんなものは何にだって言える事だ。どんなゲームだってそうだし、現実が一番頑張らなきゃいけない。そんな、何処にでもある言葉が頑張れ、だ。

ふと、隣の小人が何か言った気がしたが、横を見ても特に何もなさそうだった。

「とはいえ、頑張れだけじゃ物足りないだろうからな。ここは一つこの世界のやり方を見せてやろう。おい、そこのお前！」

「俺、ですか？」

「そうだ、お前だ。ちょっとこっちに来い」

いきなりの指名に困惑しつつ前へ出る。

次の瞬間、俺の目と鼻の先に鬼灯さんの拳があった。

「…っ？」

何もできず、拳が目の前に来てからやっとな動こうとする。拳のせいかは分からないが、顔にかすかな風が当たっていた。

早い。見る事はできても動く事はできなかった。

想定してなかったせいもあるだろう、だが、仮に来るのが分かっていたとしても反応出来るだろうか。

あいにくと俺は素手での喧嘩なんてした事がない。いきなり殴りかかれても、どうすればいいか全く分からない。

「つとまあ、今のお前達だところなる。いや、喧嘩なれしてる奴はもうチョイと動くがな？普通に生活したら今のパンチには棒立ちになるしかないわな」

「はあ…そうですか」

フォローされてるんだろうが、後ろの人達の視線が怖い。
恥ずかしくて振り向けないぞ、畜生。

「普通に生活してたら、今のパンチに出会う事はそう無い。だが、ここではそうじゃない。野生の獣は今ぐらいの攻撃なら普通にしてくる。それじゃあお前はどうすればいいのか、おとなしくやられるしかないのか。そんな不可能を可能にする方法がこの世界には存在する」

「それは…?」

いや、分かってるんだが、聞かなきゃいけないような雰囲気が出てしまっただな。

鬼灯さんは待ってましたとばかりに破顔し、答える。

「それがスキルのインストールだ！」

スキルのインストール。このゲームが今、世界中で人気である理由の最たるもの。脳内インストール型スキル制。

この部分だけはホームページでもしっかりと読んだ。

この世界で言うスキルとは現実での技能の事だ。技能とは歩くといった基礎的なものから、スポーツといった複雑なもの、とにかく無数に存在する。

今の世界はこの技能を技能データとして脳内から抽出し、別の人間の脳内にインストールする事でその技能を移し替える事ができる。よって高ランク、質の高い技能データは莫大な値段がつく。

低ランクの技能は高ランクに比べれば、頑張れば手が届く値段で取引されているが、そんなもの買っても大して旨みがないので、脳内インストールを経験した事がある人間は珍しい部類に入るだろう。

「さあ、こいつをくれてやる。早速やってみる！」

そういつて鬼灯は右手の黒い、手枷のようなDデバイスを起動し操作する。

すると俺のDデバイスにデータが送られてきた。

右手を振り画面を開く。

<鬼灯からデータを受信しました>

<スキルデータ『回避』：ランク1が存在します>

<インストールしますか？>

<Yes/No>

技能のインストール…いつか絶対にしてやると誓った。その為にバイト漬けの青春を過ごした。それが、

今日の前にある。

ランク1、大したものじゃない、だが…

<『回避』：ランク1をインストールします>

風鈴の音が、聞こえた。

視界が、暗くなった、気がした。

…何かあったか？

「おう、目が覚めたな」

目の前には、さつきと変わらず鬼灯さんの姿がある。
何も変わってない？

「あの、今一瞬目の前が…」

「ああ、お前は今5分間眠っていたからな」
「眠っていた…?」

そうだ、と鬼灯はうなずき。

「スキルデータをインストールする際、ランク×5分間眠る事になる。寝ている間にスキルをインストールするわけだ。だからほら、後ろを見てみる」

言われて振り返ると、そこには立ったまま目を閉じている他の4人の姿があった。

いや、なんて言うか、凄い無気味だ。

あ、しかし小人の寝顔は凄い可愛いな。さっきまで強気な感じの顔だったからギャップらしきものが。立ったままでなければ、尚良かったんだが。

っと、あんまり寝顔を見るのは良くないな。

「しかし、そうならそうと言って欲しかったです」

「いや、言わない方が面白いかと思ってな。実際ビツクリしただろっ?」

その言葉と同時に、鬼灯さんが右の拳を放つ。

見える、と同時に今度は身体が動いた。自然に左足で地面を蹴って右へ。

拳は俺の顔のすぐ横を、風圧を感じさせながら通り過ぎていく。

「って寸止めじゃないんですか!？」

「いや、避けられるはずだから良いかと思っただけ」

「そりゃ避けられましたけど!…って、え?」

避けた。今自分は確かに避けた。

それだけじゃない、どう良ければいいかが頭の中にあり、俺の身体がそれをしっかりと再現していた。ごく自然に。

「これが…スキルのインストール？」

「そうだ。そして、それこそがこの世界を生きていく際に活用出来る、便利な道具ってわけだ」

何度目か分からないニヤリ顔に、更に自慢げな顔を足して鬼灯さんは笑った。

5話

その後、起き出した他の人達も鬼灯さんの洗礼を受け、ある人はしきりに興奮し、またある人は不思議そうな顔をしたりと色々だった。

「さて、全員スキルインストールがどんなものか分かったな？こいつを忘れるな。この世界ではこいつが常につきまとう事になるからな」

全員の顔を見渡し、満足したのか彼は大きく頭を縦に振った。

「さて、さつきお前らにくれてやったスキルデータだが、手に入れる方法は簡単だ。街に行つて買う、これだけだ」

「買う、んですか？」

「そうとも、現実と同じさ、これは。街に行けば各種ランクのスキルデータが売ってるし、その中には各人の身体能力に適合したスキルデータがあるはずだ。低ランクなら数が多いからなおさらだな」

あの、と獣人の男が遠慮がちに鬼灯さんに声をかける。

「身体能力の適合って…なんですか？」

「そうか、ここは知つとかなないとまずいところだからな、知らないなら全員良く聞いておけ」

いいか、と言い聞かせるように彼は言う。

「スキルデータってのは、元は人間から抽出されるものだ。だから、

同じランクのスキルデータでも、抽出された人間によって内容が異なる。勿論、同じランクなら技能的には大差ない。だが、同じ1ランク回避スキルでも身長200cmの奴から抽出された回避スキルと、身長150cmの奴から抽出された回避スキルじゃあ避け方が全然違うつて分けだ」

これも現実と同じだ。ここら辺は、技能データのことを詳しくない知らない事だろうな。

そういった事もあって、技能データにはランクと同時に抽出者の身体能力が併記される事になっている。

これを偽装したりすると重大な犯罪だ。

何せ、1度インストールした技能は元々自分にあったその技能と混じり合う。その結果身体能力の差によって技能がなじまず、技能を抽出する事になった場合

「元からあった技能も抽出され、脳から消えてしまう」

身体能力の差も、少しなら問題は無い。が、さっきの例のように身長が50cmも違えば色々大変な事になるだろう。

しかし、この世界にはそんなに無数の技能データ、スキルデータが存在するのか？

各人のニーズにあったデータが都合良く存在する。にわかには信じがたい話だな。

「どうやら、知ってる奴は信じられないって顔してるな。だから教えてやるが、お前らが考えているとおり、そんなに都合の良いスキルデータがいっぱいある分けじゃない。だが、この世界ではスキルデータの買い取りとコピーによってできる限りのスキルデータをそろえているのさ」

スキルデータの買い取りとコピー。

この話が出たとたん、雰囲気が変わった奴が2人。

さっき質問したのは違う獣人の男と妖精人の女だ。

「お前らも宣伝の広告ぐらいなら見ただろう？俺たちはお前達冒険者からいつでもスキルデータを買い取っている。しかも、それはこっちの金だけじゃない、お前達がよく知っている世界の金でも買い取っている。だから、俺たちの元にはスキルデータが集まってくるし、それをコピーして増やしている。お前達も要らないスキルデータは売ってくれて構わんぞ？」

「しかし、さっきの話ではスキルデータは買う必要があるんですよね。それを売ったのではこちらには赤字しかないんじゃないか？」

最初に質問した獣人がまた質問をする。

それにそんな事も知らないのかという目をするもう一人の獣人と妖精人。

いや、そこまで馬鹿にする事無いんじゃないか？

俺も知らないし。

「良い質問だな。スキルデータは買わなければ手に入らない。それは変わらないが、1つだけ勘違いがある。スキルデータを買うのに必要なのはこの世界の金だけ？」

それに、と鬼灯さんは言葉を続ける。

「スキルデータは、ランクが高ければ高い程高値で売れる。そして、スキルを高ランクにする方法はなんにもデータを買うだけじゃない」「その方法は…なんですか？」

その言葉に鬼灯さんは身体の前で左の掌に右の拳を打ち付けて言う。

「鍛錬だ！」

鍛錬、つまり鍛えろって事か。

鍛える…か。

「鍛錬し、訓練し、実戦しろ。そうすればお前達のスキルランクは絶対上がる。そしてそれからどうするかは…お前達次第だ。もちろん、どうやってスキルランクを上げるかもな」

そこで鬼灯さんは口を閉じ、俺たちを見た。

どうやって上げるかは俺たち次第。

金か、鍛錬か、悩む必要もないような事だ。どっちが楽かなんて一目瞭然だろう。

そうとも、決まり切った事だ。

「自分のスキルがどの程度のランクか知りたかったら、Dデバイスを開いて知りたいスキル名を検索してくれ。そして最後に言っておくが、このスキルはお前達の頭に存在するもんだ。だから、この世界で得たスキルはお前達の世界でも問題なく使える」

「そうなんですか？」

「ああ、だからお前達の世界で鍛錬すればこっちの世界でも無駄にならねえ」

さて、と鬼灯さんは後ろを向き、少し離れたところに置いてある、えらくでかい袋を取ってくる。

そして袋を逆さにして中にあるものを床にぶちまけた。

大剣、杖、腕輪に服など他色々。これはもしかして。

「さあ、こいつが何かは分かるだろう？さっきも言ったように、お前達はみんな素人。いくらスキルインストールがあるからといって、最初から高ランクのスキルを買うのは懐具合を考えても難しいってもんだ。そんなお前達がどうやって凶暴なモンスター達に対抗するか。その答えがこいつらアイテムって訳だな」

言いながら、鬼灯さんは床にある杖を拾い上げた。

「こいつは炎の杖だ。魔法系の装備では1番低ランクの武器だな。ぱっと見はただの杖だが、こうすると」

彼は杖を横に構え、左から右へと大きく振り、そのまま流れるように杖の先を頭上に持っていく。そしてそのまま振り下ろすと同時に言葉を発する。

「炎よ！」

その瞬間杖の先から炎の塊が現れ、炎塊は真っ直ぐに進み、そのまま船外へと消えていった。

俺たちは皆、その光景を呆然と見つめていた。

この瞬間だけは、ごつく、むさ苦しい鬼灯さんの姿が神秘的な、魔法使いのように見えた。

「とまあ、こんな風に魔法が使えるって訳だ。ちなみにこの世界は今のように特殊な動作に発声を加える事で魔法を発動出来る。これら一連の動作を合わせて魔法スキルと呼んでいるな」

杖で床に突き、俺たちを見回す。

「この世界はアイテムに様々な特殊効果が付いている。だからアイテムを上手く使えば開拓を有利に進める事ができるだろう。ただし……」

「ただし…なんですか？」

もう獣人君は質問役が板についてるな。俺が質問しなくて良いので素晴らしく楽だ。

「この世界のアイテムは条件を満たしていなければ装備する事ができない。例えば、この大剣だが、おいフランベルだったな、持つてみる」

鬼灯さんは床の大剣を指さし指示する。すると隣の小人が前に出て大剣を持ち上げようとす。

なるほど、あの小人がフランベルか。

しかし妙だな。あの大剣全く動かないぞ。

彼女が大剣を持ち上げようと、全身を使って頑張っているのだが、持ち上がるどころかピクリとも動かない。

「そこまで、もういいぞ。何故フ、ランベルがこいつを持ってなかったか。それは力がなかったからじゃない。こいつは妖精人と小人が持てないように制限されてるからだ。そして、カケル。こいつを持つてみな」

今度は横にある槍を指さし、俺に向かって言った。逆らう気もないので、俺は素直に槍を持つととする。

人間種族は装備の制限が少ない。しかも槍なんてポピュラーな武器が制限されてる筈もなく、簡単に持ち上が…持ち上が…らない！？

床を思い切り踏みしめ、引っ張るように持ち上げようとするが、槍は全く動かない。

どうなってる!?

「よし、やめろ。さて、今度はカケルが槍を持ってなかったわけだが、今度は装備制限のせいじゃないぞ。人間種族は制限が少ないからな、この槍も勿論人間種族に制限は入っていない。では何故持てなかったか分かるか?」

「それは、そのカケルさんの体力が足りなかったからでは?」

妖精人の女性が情け無さそうな目でこちらを見てくる。

おい、ちよつとイラツとくるんで止めてもらえないかな?

視線で通じたのかそうでないのか、彼女は興味なさそうに鬼灯の方へ向き直った。

獣人2人が気の毒そうな顔でこちらを見る。同情は要らないがありがとう。

ちなみにフランベルはこちらを見ようともしない。

「足りなかったのは体力じゃない。足りなかったのは…スキルランクだ」

こちらを見てニヤリと笑う。段々この笑い方には慣れてきたぞ。

「この槍は、装備するのに槍スキルのランクが5以上必要な槍だったのさ。この様に、アイテムは種族制限だけじゃなく、ランク制限も存在する。勿論強いアイテム程高ランクのスキルが必要になるってわけだな」

種族制限とランク制限。これはちゃんと覚えとかないとな。

恥をかかされたせいで、むしろ忘れられない気もする。

「アイテムは、見ただけじゃどんな効果や制限があるかは分からない

い。店売りなら店主に聞けば教えてもらえるが、外で見つけたようなものは、本で調べるか、知ってる奴を捜し出すかするしかないな」「外で見つけるといふのは？」

「宝箱だったり、お前らのお仲間が落としたものだったりだな」

仲間が落としたもの？

どついう事だ？

「どついう事ですか？」

良く聞いてくれた、獣人君。

「お前達がアイテムを落とすパターンが何種類がある。単純に気付かずに落とした、荷物が持てなくなったので捨てた、などがあるが、一番多いのは…死んだ時だ」

「死んだ時、ですか」

「そうだ。この世界は死んでも、指定されたホームポイントに帰還する事になるだけだ。スキルのランクが下がったりはしない。だが…持っているアイテムは全てその場に落とす事になる。お金も装備品も、死んでも落とさない効果のあるアイテム以外は全部だ」

きつい、な。

ホームポイントの近くならともかく、ダンジョンのど真ん中で死んだりしたら取り戻せそうにない。

「だから、なるべく死ぬな。危ないと思ったら、さっさと逃げろ。良く言う言葉だが、まだいけるはもう危ないってやつだな。さて、これで俺からの訓練は終わりだ。何か質問はあるか？」

「ひとつ、質問があります」

フランベルが手を挙げ、鬼灯を見る。

「何だフランベル。言ってみろ」

「ありがとうございます。先程、外でもアイテムを見つける事があると言っていましたけれど、外で見つけたアイテムが制限で持てなかった場合は、諦めるしかないのでしょうか？」

確かに、それは気になる内容だ。

外で見つけるアイテムは、冒険者が死んで落としたものが多い。とすれば、結構な掘り出し物の可能性も高いし、ランク制限の高いアイテムも多いだろう。なら、出来る限り持って帰って売りたいところだ。

「良いところに気がついたな。これは本来チュートリアルでは教えないんだが、質問には答えると言っていたし、教えてやる。制限により持てないアイテムも、直接触れなければ持つ事はできる。但し、持っても何とか運べる程度の重さだから、振り回したりはできないがな」

「しかし、それでは結局それ以外が持てなくなってしまつて意味が無いのでは？」

「そんな事は無いぞ？ま、これ以上は自分で考えるか調べるんだな」
「：分かりました。ありがとうございます」

フランベルは不満げな顔をしつつも、幾分か納得した様子で下がった。

しかし、今の情報はかなり大事だな。まあ、鬼灯さんが言ったように、調べれば分かる事なのかもしれないが。

「もう質問はないか？」

最後の確認とばかりに鬼灯さんが皆の顔を見渡すが、特に誰も声を上げない。

俺も特に質問はない、はずだ。

「よし！それでは最後に、これだけは気をつけろという事を教えて訓練を終了する」

良く聞けよ、と彼は言い

「まず、スキルのインストールだが、先程言ったとおり、インストールにはスキルランク×5分の時間がかかり、その間は無防備になる。出来る限りスキルのインストールは、冒険者の宿で部屋を取って行つと良い。そして、この世界から出る時、つまりログアウトする時だが、安全地帯で無ければログアウトすることは出来ない。これも基本的には冒険者の宿の部屋が適任だ。そして、これからお前達が大陸を開拓するに当たって資金が必要になるだろう。動物たちが落とすものを売るだけでは中々資金は貯まらない。そういう時は冒険者の宿でクエストを受けると良い。さて、ここまで言えば何を言いたいかわかるな？」

彼は、最早トレードマークになったニヤリ顔で言った。

「まずは、冒険者の宿で部屋を取れ。全てはそこからだ。以上、訓練を終了する！」

「……………」ありがとうございます！……………」

勢いでお辞儀してしまったが、みんなしてたので恥ずかしくはない。

それに、ここまでしっかりと『訓練』して貰ったんだ。お礼はちゃんと言っておきたい。

「良い返事だな、お前ら。さて、そろそろ到着するみたいだぞ」

鬼灯さんは、船の向かう先を親指で指し示した。

そこには広大な大陸が見えていた。何処まで続いているのか分からない陸地、遠くには、てっぺんが雲に隠れて見えない程巨大な山脈がそびえ立ち、そして今船が向かう先には

「港だ。それもかなりでかい！」

この船も5階建てのビル程度の高さがある船のようだが、同じような船が20隻以上泊まっている。

港では、沢山の人が忙しそうに働いているのが遠目にも分かった。気付けば船が揺れている。

「でかいのは港だけじゃないぜ？港のすぐ外には、でっかい町並みが扇状に広がってる。冒険者としてセントレイル大陸に来た奴らが必ず最初に訪れる、始まりにして最大の港街」

鬼灯さんは手を大きく広げ、もう何度目か分からないニヤリ顔で俺たちに向かって言った。

「グランポートシティへようこそ！新たなる冒険者達よ！」

6話

船がゆっくりと港に接岸していく。
最後に大きく揺れた後、船の揺れが小さくなっていった。

「到着、だな。後はその階段を下りればグランポートの西区画港だ。みんな西港って呼んでるな。人混みが凄いからスリには気を付けるよ?」

「気をつけると言っても、盗まれるようなもの何も持ってませんけど」

おっとそうだった、と鬼灯さんは後ろ手で頭をかき、Dデバイスで誰かに連絡をする。

すると、すぐに船員の姿をした人がリュックサックのようなものを5つ抱えて持ってきた。

一人である量を持つてくるとは、やるなあ船員。

「これからセントレイル大陸を開拓するお前達に選別だ。一人一個ずつ背負い袋を受け取れ。中には水袋、毛布、ナイフ、たいまつ6本に火口箱にロープ10m、そしてこの世界の通貨1000goldだ。まあ飽くまで最低限の道具だから、足りないものは各自で買い足してくれ」

これは、まさしくファンタジーって感じのアイテムだな。すげえ。中身を確認し、よく分からない感動に打ち震えていると、もう一度船員が、今度は何か丸まったものを持ってきた。

「そして、次がこいつだ。これは羊皮紙ってやつだな。更に、こい

つには死亡時紛失無効の効果が付いてる。ほら、受け取れ」

渡されるがままに受け取り、丸まったそれを広げる。

これが羊皮紙か、初めて触るな。当たり前だけど。こんな肌触りなのか。

それにしても、この羊皮紙何にも書かれてないぞ？

「何故こんなものに死亡時紛失無効なんて効果が付いてるんだ？」

「良い質問だ、カケル」

つい口に出してしまった言葉を拾われ、鬼灯さんが話し出す。

「こいつに何で死亡時紛失無効の効果が付いているかだが、そんなだけこれは大事だつて事だな。何故なら、お前達はこいつに、この大陸の地図を描かなきゃいかんからだ」

「地図：ですか？」

「そうだ、お前達はこの大陸を開拓しに来た冒険者だからな。何を持って開拓とするかはお前達に委ねられているが、目に見える成果として地図の作成が存在するんだ。この大陸の何処に何があるかを描き込み、ある程度の量を描いたら宿の店主にでも見せる。相応の報酬が手に入るはずだぜ」

「そんな地図なんて、今まで何度も提出されているのでは？」

「そうとも、この世界に今何万人の冒険者が居るか知らないが、そんな地図なんて、ごまんと提出されているだろう。」

そして、良くある質問なのだろう。鬼灯さんは慣れた口調で説明を続ける。

「勿論、地図は何万枚と提出されている。だが、ここは未開の大陸だからな。情報はあればあるだけ良い。たとえ同じ内容の地図だつ

たととしても、情報が多ければ、地図の情報自体の信憑性が増すから意味があるし、時間がたてば土地に何か変化があつて、違う内容が描かれることもあるかもしれないからな。最も、その場合はその情報が正しいかチェックが入り、違った場合は罰金、という事にもなる。描くからには正確に描いてくれよ?」

そして、言いながら鬼灯さんはDデバイスを操作した。そのすぐ後、俺のDデバイスがデータの受信を知らせる。

Dデバイスを起動し、データを開くと、そこには俺の顔と名前、そして番号が書かれたカードのようなものが映し出された。

「そいつが最後だ。それは冒険者達に配られるカード、身分証のよ
うなものだな。地図を提出する時や、クエストを受ける時などはそ
いつを提示しないと駄目だからな。あとは、フレンドになりたい場
合はそのデータを送り合えばなれるぜ」

なるほど、大事なものだな。

Dデバイス内に保存されているようなので、無くす事もない。ま
た、キャラクターを詐称しても、こいつを出せと言われれば速攻で
ばれるわけだ。

「さて、長くなつちまつたな。これで本当に最後だ。そんじゃお前
ら、この世界を楽しんでこい!そうすりゃまた会う事もあるだろう
ぜ。じゃあな!」

鬼灯さんは大きく手を振ると、船の中へと消えていった。

「あなたは行かないの?」

鬼灯さんが消えていく様子を眺めていると、声をかけられた。

声の方を見ると、フランベルが一人だけ立っており、他の人達は居ない。

「どうやら先に降りたみたいだな。」

「勿論行くさ。君こそ行かないのか？」

「あなたがぼつと突っ立ってるから、どうしたのかと思ったんだよ。それじゃ、私も行くわ。縁があればよろしく。」

そう言って、軽く手を振りながら颯爽と彼女は船を降りていった。降りた先は人が溢れかえっており、小人の彼女はすぐに見えなくなった。

「つーか、なんだありゃ。」

人の海、そうとしか表現できないほど人が溢れている。たとえならあれだ、大学のサークル勧誘みたいな。

船を下りる階段の半ばまで来て、俺はそのたとえば間違ってたなかつた事を悟った。

「こちら星空の宿！新人冒険者には特別に宿代3割引！3割引を行っております！是非宿には星空の宿を！」

「潮風の燕亭、潮風の燕亭です！新人向けのクエスト、山盛り用意してます！どうぞ潮風の燕亭にお越し下さいませ！」

「ギルド、クロスウィンドは初心者募集中！君たちもみんなで仲良く冒険の旅に出よう！加入者には低ランクスキルデータがもらえるキャンペーン中です！」

「初心者皆さん、冒険に不安は御座いませんか！？もしどうしたらいいか分からなくなった時は、グランポート冒険者学校へお越し下さい！懇切丁寧にお教えいたします！今なら入学費無料ですよ！」

「お！あの小人可愛いぞ！今日はランクが高い子が多いな！全員撮

れ！シャッターチャンスを逃すなよ！」

「『『『『『おおー！！』』』』」

：最後は何かおかしい気もするが、とにかく大学の新歓時期と大差ないな。

前後を見れば、何処にいたのか新規の冒険者達が列をなしているし、横を見れば別の船からも人が降りてきている。向こうの船の方の勧誘は英語が聞こえる。あつちは響きからしてドイツ語？どうやら船によって国が違うみたいだな。

よく考えれば乗っていた奴らはみんな日本語しゃべってた。見た目外国人な奴らばっかだったけど。

ぱっと見日本の新規冒険者が一番多い気がするな。やっぱり夏休みが始まったばかりで、新規加入が多いのかもしれない。

やつとの事で船から降りると、案の定人にもみくちゃにされる。

こういうのは苦手なんだ…さっさと逃げるに限る。

荷物を盗まれないよう、背負い袋をしっかりと抱え、急ぎ足で人混みを縫っていく。

「ふう、やつと出られたか…」

しばらくして、何とか人混みから脱出する事に成功。

しかし、格好から初心者バレバレの俺がこんな所にいたら、速攻で勧誘の餌食だろう。急いで逃げるとするか。

「さて、道はどこだ…っつと？」

辺りを見回すと、人だかりから一步離れたところで女の子が勧誘のようなものをしていた。

なぜようなものかと言えば、

「あのー、えっと、新人のみなさん、宿泊に静謐なる雲亭はいかがですかー？その、良いところですよー」

片手を上げ、精一杯声を出しているようだが、あまり効果は上がっていないようだ。

「ほんとに良いところですよー。それから、あと、とっても静かですよー。あっ、料理もとても美味しいですよー」

その場で背伸びをしながら何度も声かけしているが、あの呼び文句では成果は上がらないだろう。というかもっとセールスポイントは無いのだろうか。いや、料理が美味しいってのは心惹かれるけど、しばらくして、どうやら諦めたらしく、とぼとぼとこちらに向かい歩いてくる。

どう見ても落ち込んでるなー。

と、ぼうつと見てるうちに彼女が目の前まで来てしまった。

向こうも前に誰かいるのに気付いたらしく、顔をあげてこちらを見る。

「あー！その格好ですけど、もしかして新人さんですかー？」

「ええ、そうですけど…」

「やっぱりそうですよねー！もう冒険者の宿は決まっていますかー？」

今が勧誘のチャンスとみたか、顔がキラキラと輝いてこちらを見てくる。

これまた美人と書いていい人だ。まあそうはいってもここまで会ってきた人達も、今そこらを歩いている人達もみんな美人なのだが、さすがVR世界。

腰まである長いウェーブのある髪の色は金、おっとりとした、たれ目の瞳の色は翡翠に輝き、小さめの口は奥ゆかしさを感じさせる。

服装は白と黒を基調とした、ロングスカートのシックなウエイトレス姿。身長は俺の鼻ぐらいの高さで、しっかり出るところが出たその姿はフランベルとは大違いだ。ぱっと見た感じ獣っぽくもないし、耳も細くないのでおそらく人間種族だろう。

「あのー、やっぱりもう決まっちゃってますかー？」

「あ、いえいえ、まだ決まってませんけど」

「ならば是非、ウチの宿に來ませんかー？良いところですよー」

さて、どうしたものか。これは所謂捕まってしまった状態だな。しかし、降りてすくなものだからあまり状況がつかめてないんだよな。

勧誘されてるってのは分かるんだが、ギルドとかならともかく、何で冒険者の宿が勧誘をするんだ？

「あの、宿に行く前にですね、何故冒険者の宿が勧誘してくるのか教えて貰って良いですか？」

「あー、そう言えば初心者さんはそう言った事も知りませんものねー。私も去年はよく分からず右往左往したものですよー」

分かる分かる、と彼女は首を大きく振りながら、

「実はですねー、冒険者の宿には2通りありましてー、WCDが直接運営してる宿と私達冒険者が独自で運営してる宿があるんですよー。それで、冒険者が運営してる宿は、家賃とか稼ぐために、必死で勧誘してるんですよー」

「冒険者が宿を経営してるんですか？」

「はいー、このゲームは色んな事ができますからねー。私が今してるのも、私が泊まってる宿のアルバイトですしー、何も戦うだけのゲームじゃ無いんですよー」

なるほど、あそこで宣伝してたのは、冒険者が運営してる宿の人達だったのか。

鬼灯さんに聞いた話じゃ、冒険者の宿でクエスト選んだりスキルインストールするみたいだし、かなり重要みたいだからな。それを商売にできるならかなり儲けられるんだろう。その分同業者も多いってわけだ。

「冒険者の宿は重要ですよ。店によって受けられるクエストに偏りが出ますし、大抵は同じ店の人とパーティ組む事が多いですからねー」

「なるほど、それは大事ですね」

「でしょー。ですから、是非ウチの宿に来ませんかー？」

来て来てーっと言った、輝かんばかりの笑顔でこちらを誘ってくる彼女。

その笑顔は非常に魅力的なのだが、こればかりはそう簡単には決められないだろう。

「普通の人は、ネットで宿を決めてから来るんだろうな……」

「そうですねー、普通はそうかもしれませんー。」

おっと、つい口に出してしまった。

しかし、独り言に普通に返答を返してくるとは、この人やるな。

まあ、ともかくは情報、かな。

「えっと、とりあえずあなたの言う宿の事、教えて貰って良いですか？」

「あ、はいー。私の居る宿は、静謐なる亭亭と言いましたねー、宿主さんは寡黙だけどいい人でー、店も静かで落ち着いた雰囲気です

しー、料理も美味しくとってても良いところですよー」

ここぞとばかりに勢い込んで、身振り手振りでどれだけ良いところか紹介してくれる。

してくれるのだが、しかし。

「あの、静かで落ち着いているのは良いんですが、それって利用してる冒険者の方が少ないって分けじゃ…無いですよね？」

「…いやー、そんな事…あるかもしれませんねー。はい、すみません、そうなんですー…」

一気に落ちこみ、下を向いてしまう彼女。

しまった…どうやら痛いところを突いてしまったようだ。

「でも、ほんとに良いところなんですー。それだけは嘘じゃないんですよー…」

「あ、あの、すみません、失礼な事言ってしまったって」

良いんですよー、と彼女は力なく首を振り、

「ほんとの事ですからねー。それに、最初なら活気のあるところに泊まるべきなんですー。何をするにせよ、人がいるってのは大事ですからねー」

お時間取らせてごめんなさいー、と彼女はお辞儀して、去っていくとする。

その後ろ姿が、あまりにも淋しそうだったからだろうか、いや、そんな格好いい理由じゃない。

そんな姿を見て声をかけてしまいうくらいには、俺も男だったってこと何だろう。

「あの！」

「何ですか！。評判の良い宿は、私知りませんよー？」

「いや、そうじゃなくてですね……」

くそ、恥ずかしいな。

俺は後ろ手で頭をかきながら、精一杯さりげない風を装いつつ彼女に告げた。

「案内してくれませんか？その……静謐なる雲亭に」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9151z/>

The possible world

2012年1月2日01時46分発行